

研修名	第1回 京丹後市自主研修会 支援 令和元年6月29日(土) 13:45~16:00
講演	「特別支援ってなあに? or どんなこと?」 ～ 子ども・保護者へのアプローチ ～
講師	京都府立与謝の海支援学校・総括主丹後地域教育支援センターよさのうみ 後野 雄一郎 氏

1、講演要旨

1) 「支援する」とは、

人にとって、得意なことや苦手なことは誰にでもある。「できる環境」を整えることが支援

- ① 身体支援、言語支援、視覚的な支援の3つの支援
- ② 「障害」とは、身体(脳を含む)の一部がうまく働かなくて、生活や勉強などの活動に参加しづらいこと。障害があると選択の幅は狭くなるが、「障害」は、環境によって軽くすることができる。

* 京都府立与謝の海支援学校小学部教育目標

「自分の思いを表現し、健康で生き生きと主体的に活動できる児童」
・挨拶・ルールなど基本的な行動・ルールの確立・障害の特性に応じた指導・コミュニケーションという基本を重視した子ども主体の教育を行っている。

2) 特別支援とは、「特別な支援」ではなく、「どの子どもにも優しい支援」

① 特別支援教育

・従来の特殊教育の対象の障害だけでなく、LD、ADHD、高機能自閉症を含め、すべての障害のある児童生徒の自立や社会参加に向けて、その一人一人の教育的ニーズを把握して、そのもてる力を高め、生活や学習上の困難を改善または克服するために、適切な教育や指導を通じて必要な支援を行うこと。

② 特別教育の基本的な考え方

・これまでの障害の種類や程度に応じ、特別な場所で指導を行う「特殊教育」から、障害のある児童・生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、適切な指導や必要な支援を行う「特別支援教育」への転換。
・特別支援が必要な子どもには“ないと困る”支援であり、どの子どもにも“あると便利”な支援を少しでも増やす。

3) 気になる子の気付き

① 関わる先生の「気づき」がすべての出発点となる。支援を要する子どもが苦しんでいる、困っていることに気付くことができるか。

② 「どこでつまづいているのか」を的確に捉え、周りの協力を得て具体的指導を行う。

4) 子どもたちへのアプローチ…子ども達が（分かって動ける）ための支援

- ① 構造化…・環境の構造化（すっきり）
- ② 視覚化…・映像化・時間の視覚化・感情の視覚化・評価の視覚化・整理整頓
- ③ 具体化…・肯定的で具体的な言葉掛け

5) 保護者へのアプローチ

- ① 対応
 - ・保護者や家族の理解の状態、生活状況、子どもとの関わり方の把握
 - ・自分の感情に気付く・明確化・感情修正
- ② 配慮・心がけ
 - ・「おだやかに」「たおやかに」「すこやかに」

6) 指導者の役割

すべての支援は、すべての子ども達が、楽しく、安心して、自信をもって園生活を送るために…

- ① 子どもを理解する
- ② 苦手なことや、理解困難なことを理解する
- ③ 得意、または参加できる方法を整理する

2. 感想

この講演を通して、私の「障害」に対する思い込みや勝手な理解、また支援を要する子ども達の苦しみや困りへの気付きについて省みることができた。『人にとって、得意なことや苦手なことは誰にでもある。「特別支援」とは、特別な支援ではなく、どの子にも優しい支援』という言葉に、「障害」「特別支援」ということへの自分自身の考えを改める必要があると思った。

また、一人一人の個性や特性を受け止めて保育教育を進めていくことの難しさを感じていた私にとって、「できる環境」を整えるという環境の工夫や適切な保護者対応など、子どもや保護者へのアプローチは、とても大きな学びだった。すべての子ども達が、楽しく、安心して、自信をもって園生活を送ることができるよう、これからも園全体で“チーム”として研鑽を積み取り組んでいきたい。

(記録 網野こども園 簗下 和栄)